

膀胱内異物(留針)の自然排出例

昭和30年4月11日受付

信州大学医学部皮膚泌尿器科教室(主任 橋本教授)

西村幸雄

Yukio NISHIMURA

Department of Dermato-Urology, Faculty of Medicine, Shinshu University

(Director: Prof. M. Hashimoto)

The author reported a rare case, in which a pin inserted into the urinary bladder probably for the purpose of masturbation was excreted spontaneously without any operative procedures.

緒言

膀胱及び尿道内異物に関する症例の報告は文献を通覧するに枚挙に遑がない。こゝに手淫により膀胱内に入った留針が自然に排出された興味ある症例を経験したので簡単に報告致したい。

症例

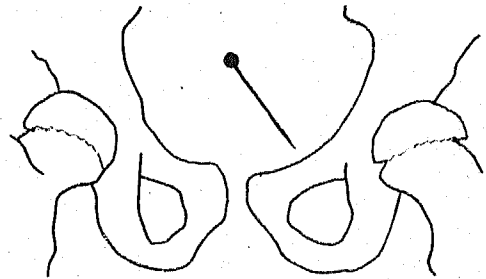
患者: 16才の男子, 中学生。

初診: 昭和29年2月7日。

家族歴, 既往歴: 特記すべきものがない。

現病歴: 患者の言によれば, 初診当日の午後外尿道口から長さ約3cmの留針を針頭を膀胱側に向けて挿入したという。しかし動機に関しては黙して語らず, 恐らく手淫によるものと思われる。その後間もなく尿道痛を家人に訴えたので, 驚いて某医を訪れ抜針に関する色々な処置をうけたが, 既に針は尿道深く入っているので不能といわれ, 当科外来を訪れた。直ちにX線透視の下に金属プジーにて部位を計測すると, 尿道口より約11cmの位置に針頭を膀胱側へ向けた針が横たわっているのが認められたので, 種々器械的操作を試みたが摘出不能であつた。止むを得ずこれを膀胱内へ落下せしめ, 手術的操作を加えるため入院せしめた。なお患者は年少であるので, 膀胱鏡的操作は出来なかつた。その間患者は排尿終末時に僅かに尿道に刺痛を感じるのみで, 膀胱症状は全く訴えなかつた。

現症: 体格稍々小。栄養状態良好。言語不明瞭にて活潑ならず。可視粘膜に貧血なく, 呼吸器, 循環器に異常なし。腹部は平坦で軟かく, 下腹部は排尿を抑制しているためか膀胱部は稍々緊満している。しかし筋緊張, 圧痛はない。四肢に運動, 知覚障碍なく, 病的反射も認めない。浮腫も見ない。尿は淡黄色透明で異常を認めない。陰部所見では, 陰茎, 陰囊, 所属リンパ腺凡て正常である。入院時の膀胱X線像では, 留針は膀胱内中央部に斜に横たわっている(図参照)。



経過: 入院中は排尿終末時に軽度な尿道痛を訴えていたが, 別に排尿回数, 尿の色調には異常が見られなかつた。所が入院翌々日の早朝起床後第1回の排尿に際して, 中途において尿線が一時減弱したことがあつたという。しかし手術的に摘出する準備をしているうち午後の排尿に際して, 突然針頭を先端に向けて留針が勢よく尿と共に排出された。これは早朝排尿に際して留針が膀胱内で自然回転して, その頭部を内尿道口に侵入したものと見られ, 腹圧, 膀胱内圧により, 尿流と共に尿道を滑走して幸にも排出されたものである。針の外観は挿入前と何等変わらず, 長さ約3cmで針頭の直径4mm大の留針であつた。

総括なびらに考按

膀胱及び尿道内異物症例は文献を徴して見るに基た多く, 今日までに400余例の報告がある。そして統計的観察についても, 20余名の諸氏によつて報告されているので詳細は原著に譲る。膀胱内異物の侵入動機については, 手淫を目的としたものが最も多く, 竹内40%, 後藤35%, 土田47%等の報告がある。又種類は多々あり, 後藤(昭28)の本邦統計によれば, 縫針, 留針等金属製品によるものが全体の12%を占めている。年令的には何れの報告を見ても20~30才台に最も多く, 性別では男子が遙かに多い。除去方法について

は、観血的及び非観血的によるものがほぼ相半ばし、その他自然排出は割に見られたというが、これらは毛髪、蛔虫、蛆、稻の茎、蠟燭、薬結石等によるものが主である。しかし本例に経験した如く尖鋭の留針が滯溜間もなく、男子尿道から自然排出したのは未だ文献上類例がない。

本例において留針の排出した順序を考えると、先づ早期尿が膀胱内に充満しており、膀胱底部に横たわっていた留針の針頭が幸にも内尿道口に嵌りこんでいた所、偶々排尿口の努責により後部尿道まで滑走して一時ここに滯溜していたものが、その後の排尿に際してこれを一挙に排出せしめたと見るべきであろう。留針の場合は他の縫針とは異なり、一端が球形をなしているため、一端が内尿道口へ嵌りしさえすれば、尿道粘膜に刺入することなく平滑に排出するものであるから、本例におけるが如き場合では、膀胱内を充満さ

せ患者を仰臥位に位置せしめて、X線透視の下に針頭が内尿道口をうかがはんとするとき、急激なる努責をもつて排尿せしめるのは自然排出の一方法ならんと考ええる。

結 語

16才の男子が手淫により尿道口より留針を挿入し、後部尿道迄入つたが摘出困難であつたので膀胱内へ落下させ、手術を準備中幸運にも膀胱内で廻転して自然排出された1例について報告した。

(橋本教授の御指導及び中村助教授の御校閲を深謝する)

文 献

- ①土田：日泌誌，22，6：301，昭8。 ②山本：日泌誌，23：224，昭9。 ③赤坂：臨牀皮泌，6，8：402，昭27。 ④後藤：皮紀要，49：163，昭28。 ⑤竹内：診断と治療，42，7：606，昭29。

レ線皮膚癌の2症例

昭和30年4月22日受付

信州大学医学部放射線科医学教室 (主任 金田 弘教授)

種 井 清 吉

信州大学医学部皮膚科泌尿器科教室 (主任 橋本満次教授)

中 村 邦 昭

Two cases of Roentgen Skin Cancer

Seikichi TANEI

Department of Radiology (Director: H. Kaneda)

Kuniaki NAKAMURA

Department of Dermato-Urology (Director: M. Hashimoto)

Faculty of Medicine, Shinshu University

Two cases of skin cancer following X-ray treatment were reported. One case had suffered from the lumbar caries and received X-ray treatment for about two and a half years. One time radiation dose was 130 r and total dose 13000 r. The factors of irradiation were as follows: 180 kV, 2.5 mA, filter 0.5 Cu+1.0 Al, field-size 10cm×10, distance 30 cm and dose in air 10 r/min. About one and a half years after the end of the treatment a small ulcer was found in the irradiated skin region and 17 years later the ulcer became 13 cm in length and 6 cm in breadth, which was diagnosed as a squamous cell cancer histologically.

The other case is the squamous cell cancer following X-ray treatment for eczema chronicum of scrotum. The irradiation factors were as follows: 70 kV, 4 mA, filter 1.0 Al, field-size 6×8 cm, distance 30 cm, dose in air 10 r/min. One time 150 r, total dose